

大学授業における日仏の子育てに関する ワークショップの開発と実践

木下 裕美子

University Course on the Planning and Organization of Workshops on Franco-Japanese Child-rearing

KINOSHITA Yumiko

Abstract : In this paper, the author will give a report of a university course on the planning of a series of workshops aiming to provide child-rearing support through international exchange, and the organization of the said workshops. A total of four workshops are planned for one year. This time, two workshops were organized on the theme “Franco-Japanese Child-rearing”. In both workshops, the participants shared their opinions on, and similarities and differences in their experiences related to a number of keywords. The keywords in the first workshop were abstracted from work, marriage, childbirth and child-rearing-related episodes gathered by interviewing a French woman who had done child-rearing in Japan, and conveyed to the workshop’s participants through a board game. The second workshop featured a card game with the keyword “What is success for a child”.

Key Words : International exchange, Service-learning, University practicum, Child-rearing support

要旨 : 本稿では、国際交流を通じた子育て支援をサポートすることを目的としたワークショップを開発する授業を行い、実践した結果を報告する。1年を通じて4回ワークショップを企画している。今回は、「日仏の子育て」をテーマとして、2回のワークショップを実施した。1回目は、日本で子育てをしたフランス人女性から聞き取った仕事・結婚・出産・育児のエピソードから抽出したキーワードを基にしたすごろくゲームをしながら、2回目は「子どもにとっての成功とは？」をキーワードにカードゲームをしながら、参加者同士の意見交換や各自のエピソードにある共通点や相違点について共有するワークショップを開発し、実践した。

キーワード : 国際交流, サービス・ラーニング, 授業実践, 子育て支援

1. はじめに

大学に対する社会的な要求は年々高まってきており、大学教育に求められる成果は、多岐にわたるようになっている。文部科学省中教審答申（2012）では、「このような時代にあって、若者や学生の「生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を育成することが、大学教育の直面する大きな目標となる」と述べられている。このような要求を受け、大学では様々な取り組みが行われるようになってきている。

授業外の活動においては、サービス・ラーニングとして、教室で学ばれた学問的な知識・技能を、地域社会の

諸課題を解決するために組織された社会的活動に生かすことを通して、市民的責任や社会的役割を感じ取ってもらうことを目的とした教育活動が行われるようになってきている(木村・中原2012)。

また、文部科学省が2012年から「グローバル人材育成推進事業」を開始しているように、高等教育においてグローバル人材の育成が求められる時代になってきており、大学の国際交流プログラムなども増加してきている(IDE 2014)

このような背景から、日本国内においても地域に根ざした国際交流プログラムを授業で設計し、実践することは、学生にとっても大変有用であると考えられる。

本稿では、国際交流を通じた子育て支援をサポートすることを目的としたワークショップを開発する授業を行い、実践した結果を報告する。

2. ワークショップと授業実践

2.1 活動系授業「行動演習」の目的

本研究は、甲南女子大学多文化コミュニケーション学科で展開される活動系授業「行動演習Ⅰ・Ⅱ」の中で展開された、学生をファシリテーターとするワークショップのうち、前期に実施された2回の実践を対象としている。

この「行動演習」では多文化共生のあり方を実践的に学ぶことが目的とされている。原則として2年次の学生が履修するゼミ単位の科目となっている。各担当教員の専門領域に関連したフィールドにおいて、「個々の課題に基づいて、様々な活動」を通じて協働し、「気づきにこだわり、その過程で必要とされる知識やスキル、態度を養う」(2016年度シラバス)ことが学生には求められる。こうした学習を達成させるために、本学のディプロマポリシーに則り、語学力、教養、行動力の総合的な力を養うための実践の場を提供している。本研究の対象となる授業担当者はフランス語圏をフィールドとして研究を行い、日本の子育て支援センターとのつながりがあること、そして、本学においてフランス語科目を担当している点を考慮し、本授業ではフランスとの交流事業をテーマとした。したがって、前期に展開する「行動演習Ⅰ」の授業目的を具体的に以下のように設定した。語学力としては、外国語がコミュニケーションツールであることを意識できること、教養面では、フランスと日本に共通する「女性とキャリアのあり方」に付随する問題を探るとともに、国際移動を伴う家族、主に女性の子育てにあり方を通じて、日本の多文化化に関連する課題を理解すること、行動力として、(1)ゼミ内における協働力を養うこと、(2)ワークショップ参加者による場作りを支える活動を遂行すること、である。

上記は学生に対する授業の狙いと学習の達成目標であるが、本授業では2つの限界-2年生を対象とした科目であることから語学をツールとして活用することが可能なレベルには至っていないこと、ゼミ員確保に困難があること-を考慮した活動の可能性を探り、国際交流事業のハブとなる感覚を養い、大学が地域資源として有効であることを示す取組みである。さらに、学生が他者への関心を高めるきっかけとして授業が機能することが可能なのかといった点について観察することを並行して行う。

2.2 ワークショップの経緯と目的

本研究で対象とした授業内で展開したワークショップは、筆者がフランス・イゼール県福祉センターのソーシャルワーカーに提案した「おやつとおしゃべり」と題した交流計画の一環である。

フランスのイゼール県エシロル社会福祉センターでは、2013年から2016年にかけて「子どもにとっての成功とは何か」をテーマにした親参加型ワークショップを通じたアクション・リサーチを行っている。エシロル市の貧困率は18.3%、失業率は15.2%となっている(Bonnabesse et Kinoshita 2015)。その中で、ワークショップは2つの困窮都市地区(ZUS)で行われた。子どもの「言語」に関する課題を親たちや関係する職員たちの意識に関する調査を市が2013年6月に行ったことが始まりである。そこで、子育てを住民全体で考える機会を提供するための取組みとして、「問題」としてではなく、「課題」としてポジティブに議論しあうために「子どもにとっての成功とは何か」をテーマに40人程度の参加者(親、職員、議員など)が集まり、子どもにとっての成功のキーワードを集め、カードゲームとして住民との意見交流に活用してきた。筆者は本活動に日本から2015年に参加し

た。フランスの親たちが作ったカードを用いて、NPO 型幼稚園の親たちにワークショップを行い、日仏にみられる普遍的な意見や違いを見出し、日仏の親たちが共感し、親たちの自己肯定感を高める機会を提供してきた。

こうした日仏ワークショップ活動に対して、日本側から新たに交流事業提案を2015年に行った。そして、日本の参加NPO子育て支援ネットワーク団体との企画素案作りのミーティングを2015年5月から筆者が行い、2016年度の実践に向けて準備を進めた。

ワークショップに参加するのは基本的に日本で子育てをしている親、ファシリテーターとしての学生と日本で子育てをした経験のあるフランス人である。

フランス側の参加者に対して、他者である日本の親が発信する意見を自分たちの意見と共通点を探りながら比較してもらうことによって、親としての自信につなげることや親であることを通じて互いに「内在する資源に働きかけること」(森田1998:18)が可能であると感じてもらうことを意図している。さらに、後期に「おやつ」をテーマにしたのは、親としての機能のひとつとして「家族の文化や価値の伝達」を認めるからである。近年、フランス国内においては、文化的背景の違いからこの点についてあまり積極的な解釈が見られない。したがって、親として普遍的な機能として認識される「伝達」の力について再確認するためのきっかけづくりである。

つまり、ワークショップの目的は以下ようになる。日本の親たちにとっては、遠方にいながらにして、親であるという日常的な行為が他人をサポートするものとして影響力をもっていることを実感してもらうためのアクティビティを提案すること、アクティビティとしての遊びを通じてフランスの文化に触れてもらうことである。学生にとっての学習目標としては、ワークショップ実施の過程において親としての生き方や子育てに対する考え方やキャリアを聞き取ることである。さらに、参加する日本の親たちにとってフランス語やフランスの遊びや歌に触れながらリフレッシュする時間となるように空間を企画することも学生の学習目標として挙げられる。

2.3 授業の概要

甲南女子大学文学部多文化コミュニケーション学科2年生の必修科目である「行動演習1」(前期)の授業において、ワークショップの設計・準備を行った。本授業の目的として、ライフコースの聞き取りの実践を通じて学生自身のキャリアデザインを考えるきっかけを与えることとし、ワークショップを企画・運営する能力を学生が身につけることを目指す。各演習が掲げるテーマを学生が選択し、履修登録するため、当該ワークショップ企画・参加学生は4名にとどまった。

授業の目的は、ワークショップそれ自体の組み立てと学生の学びの達成目標(役割認識、主体的な学びを知り、経験する)を明確にすることである。したがって、1. ワークショップの核となるプレゼンテーションの構成づくり 2. そのための情報収集とまとめ 3. ワークショップに必要なチラシや資料作成 4. ワークショップにおける役割理解 5. ワークショップのプログラム設計を行った。参加者の日本人の親たちに、子育て経験のあるフランス人女性のエピソードを紹介しながら、フランス文化や子育て事情を知ってもらい、自由な意見交換を促すための方法についても検討した。

学生たちはフランス人女性からの子育てや自分の子どもの頃の話の聞き取り、キーワードをカードにし、時系列やカテゴリー別に分類しながら表にした。その表を基に子育てやキャリアを軸に時系列にキーワードを並べたすごろくを作成した。あわせてそれぞれのマスに関連する遊び(子守唄、オノマトペカード)や写真、絵本や出産のプレゼントなどを準備した。フランス人女性の子育ての事例を知り、具体的な質問準備を行うための参考として、課題図書(西村・プベ・カリン著、石田みゆ訳『フランス人ママ記者、東京で子育てをする』大和書房、2015)を提示し、授業中に内容を紹介するように指示した。

ワークショップ実施に向けて、学生はそれぞれのワークショップのちらし作成、ちらし配布(児童館)、NPOとの連携や実践に関するすべてのミーティングの企画・実施を各自が日程を調整し、行った。配布先の選定は、子育て支援センターの意見を反映し、東灘区にある比較的規模の大きな児童館6箇所とした。学生3名で分担して行った。また、ワークショップ後に行う参加者アンケートの作成、集計も筆者指導のもと、学生が主に担当した。

担当教員(筆者)は、フランス側への企画提案と進捗状況の報告、ワークショップの準備や当日のフォローを行った。

表1 授業の具体的な内容

授業および 課外活動の日程	授業もしくは活動の内容
第1回	「行動演習Ⅰ・Ⅱ」で行う全4回の交流事業の説明, 担当者・役割分担, フランスチームが行ってきたワークショップの紹介, コミュニティに関する講義
第2回	ワークショップやファシリテーターの役割に関する文献紹介
第3回	日本で実施するワークショップの協力先とのミーティング内容の確認
課外活動 4月21日	子育て支援センターにて今後の活動スケジュール等確認ミーティング
第4回 4月26日 ～4月28日	子育て支援センターにチラシ内容の最終確認, 第5回授業で行う課題図書紹介(西村・プベ・カリン著, 石田みゆ訳『フランス人ママ記者, 東京で子育てをする』大和書房, 2015)の準備の確認
第5回	課題図書の紹介と聞き取りのための質問内容の検討
課題活動 5月10日 ～5月27日	児童館へのチラシ配布開始～配布完了
第6回 ～第7回	フランス人女性への聞き取り
第8回 ～第10回	聞き取り内容の分類, 整理
第11回 ～第12回	すごろくゲームの作成, ワorkshopアンケート調査の修正・改善, ワorkshop当日のプログラム作成
課外活動 6月23日	ワークショップ受付締め切り, 参加者への連絡(その他, プログラム確認等)
6月30日(木)	第1回ワークショップ(臨時授業)
第13回 ～課外活動	第1回ワークショップのアンケート整理, ワorkshop中に聞き取った意見のとりまとめ, 活動報告書シートを用いた振り返り, 第2回ワークショッププログラム準備
第14回	第2回ワークショッププログラムの確認, カードゲームの成形と最終準備確認
課外活動	プログラムをセンターに連絡, 参加者への連絡
7月14日(木)	第2回ワークショップ(臨時授業)
第15回 ～課外活動	第2回ワークショップの振り返り, アンケート整理およびゼミ全体の報告書作成(学科 Blog 掲載用に作成)

これらの作業について, 前期に2回行うワークショップに向けた具体的な授業内容を具体的に示したのが表1である。この表1から分かるように, 学生たちは授業時間外にもワークショップに必要な準備と活動, および文献紹介準備を行うことが要求された。

第1回のワークショップでは「すごろく」遊びを使い, 意見交換を盛り上げながらフランス文化の紹介を行うことに決定した。フランス語の教育現場において, 「人生すごろく」を用いながら語学運用力を活用させる例はよくあり, ゲームとして参加者をひきつける効果があると考えられる。したがって, 学生たちが, 「女性の子育てやキャリア」をテーマにして, フランス文化や社会と交差するキーワードを学生自身が聞き取り内容から抽出し, 「すごろく」を作成し, 使用することにした。

聞き取りに関して, 学生たちは準備してきた質問を基に協力者であるフランス人女性に日本語によりインタビュー調査を開始したが, 1回目の調査では, 学生たちはメモをとることがなかなかできず, フランス人女性の回答から発展させながら話を進めることに困難を感じていたことから, 筆者が聞き取りのフォローを行った。具体的には, 配偶者との出会い, 日本への移住, フランスや日本での仕事, 出産と子育て, フランスにいる定位家族とのつながり, 日本のPTA活動を含めた学校との関係や子どもの成人までを時系列で話せるように適宜, 筆者が介入し, 付箋にキーワードをフランス語で書き取った。2回目以降は, 書き取ったフランス語のメモを基に, 学生たちは具体的なエピソードを聞きながらメモをとる作業を行っている。その際, なるべくフランス語でキー

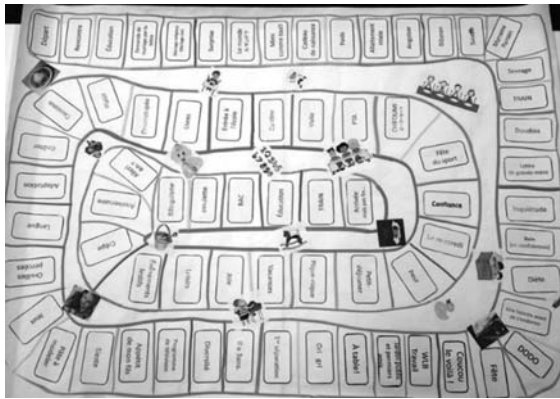


写真1 学生が作成したすごろく



写真2 「子どもにとっての成功とは？」カード

ワードを書き出すことができるように、フランス人女性と筆者がつづりの補助を行っている。

インタビュー調査実施後、テーマ別にキーワードを分類し、出来事の順に並び換え、すごろくのマス目として選定作業を行った。その際、ライフイベントとしての具体的なエピソードの中に、フランス文化・社会、日本文化との出会いにみる驚きや共感に関する要素が含まれていると考えられるものの中からキーワードを選ぶようにした。写真1に示すようにマスを構成するキーワードはフランス語で書かれている。

第2回のワークショップでは、フランスエシロール市の社会福祉センターの職員、利用者である親やアクション・リサーチをデザインする教員が協働し、2013年6月から2014年1月にかけて選択した117のキーワードを基に作成された（「成功」から連想されるキーワードの書かれた）カードを用いた。使用したカードを写真2に示す。

フランス側で作成したカードには、参加家族の多言語的背景を基に7つの言語（英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、アラビア語、トルコ語）で書かれている。本研究では、ワークショップを通じてフランス文化や社会に触れてもらうことを目的としていることから、言語は6言語のうち英語、フランス語の2言語に絞り、日本語による訳語をつけることにした。1回目のワークショップ終了後から2回目の実施までに時間が限られていたこととフランス語履修者がゼミ参加学生4名のうち2名であったことから、筆者が日本語訳をつけ、学生たちがカードを成形する作業を行った。

上記の作業にあわせて、それぞれのワークショップ実施後に行うアンケート用紙の作成を学生たちに検討してもらうことにした。アンケート実施目的は、ワークショップの評価・改善および参加のきっかけを知ることである。参加のきっかけとして、企画を知った経緯を聞くのか、参加理由を聞くのかで学生たちで意見が分かれたが、こうしたイベントの情報源を知ることが目的とし、ワークショップの参加理由とそれに期待することについては、ワークショップ実施中に行うアイスブレイクとなる自己紹介の中で実施することにし、学生が記録をとることに決定した。

2.4 ワークショップ

ワークショップは1年に4回実践することを計画しており、イベント名を「おしゃべりとおやつを通じた異文化交流」とし、前期・後期それぞれ2回となる。前期を「おしゃべりの会」、後期を「おやつの会」としている。後期の活動は主にフランスの福祉センターとの情報交換の上になりたつ。前期は後期のワークショップの広報も含めた活動である。

第1回目のワークショップでは学生が制作した「すごろく」、第2回目では、フランス社会福祉センターが作成したカードを日本語に編集したカードを用いた。

本稿では、前期の2回のワークショップを対象とする。具体的な内容は以下である。

2.4.1 第1回ワークショップ

日時は2016年6月30日の10時～11時30分であった。「日仏の子育て」をテーマに、日本で子育てをしたフランス人女性から聞き取った仕事・結婚・出産・育児のエピソードから抽出したキーワードを基に作成したすご

ろくゲームをしながら、参加者同士の意見交換や各自のエピソードにある共通点や相違点について共有しあった。また、すごろくのマスではフランスの子育てに関する活動などを取り入れ、参加者がフランス語やフランスの遊びに触れる機会を提供した。

ワークショップを実施中、学生は、参加者の意見や質問をポストイットにキーワードを書きとめ、すごろくのマスの書かれたテーマごとに整理することを予定していた。しかし、多くの意見が一斉に発せられることが予想されたため、参加者本人がマスに関するエピソードを聞いた後に、質問や意見をポストイットに書き出すことにし、学生が、マスのキーワードが書かれたスケッチブックに貼り付けていく作業を担当した。

すごろくのマスに関連する話をフランス人女性から提示し、関連するフランスの遊びや歌を披露しながら、フランス語に触れる機会を提供した。学生は司会として参加している。また、フランス語履修生たちがフランス語実践として参加していた。ワークショップ中、参加者の子どもたちは同じ会場で、教員たちによって見守りが行われた。

参加者数は以下の通りである。13名の申し込みのうち、7名の参加があった。

- ・親7名（すべて母親、子どもの年齢は11ヶ月～3歳まで）
- ・NPOスタッフ 1名
- ・教員3名（授業担当教員1名、話題提供フランス員女性1名、フランス語履修生引率教員1名）
- ・学生2名（2年生）
- ・フランス語履修生参加者6名（1年生）

これらの参加者を3グループ（親3名×1グループ、親2名と職員1名もしくは学生1名×2グループ）に分けて実践した。ワークショップの様子を写真3に示す。

当日のワークショッププログラム（表2）は事前に子育て支援ネットワークセンターに送り、情報共有を行っている。写真撮影に関して参加者に説明を行い、許可をとっている。ワークショップ終了後、30分程度の時間を設け、センターのスタッフから講評を受け、振り返りを行った。

2.4.2 第2回ワークショップ

日時は、2016年7月14日10時～11時30分であった。「子どもにとっての成功とは？」をテーマに、フランス



写真3 ワークショップの様子

表2 第1回ワークショップ「おしゃべりの会」（6月30日（木）開催）プログラム

予定時間	内容
9時00分	会場準備
9時40分	開場・受付 受付にて、名前シールを配布（グループ①～③の番号つき）
10時00分	あいさつ ゼミ紹介（ファシリテーターの紹介）、今日の「おしゃべりの会」の簡単な内容紹介、フランス人女性の紹介
10時10分 ～10時15分 ～10時25分	導入 (5分) グループになってもらう (10分) グループ内で自己紹介 まず、例としてファシリテーターによる自己紹介 どこの誰？今日のニックネーム（名前シールにひらがな、ローマ字で）、子どもの数と年齢？マイブームは？気になるお菓子は？この企画に期待してきたことは？学生の頃の思い出は？（5名×2分=10分）
10時25分	「すごろく」ゲーム (5分) ルール紹介

10時30分 ～11時05分	ゲーム開始 グループの順番でさいころを振る→止まったところでフランス人女性からエピソード紹介→グループ間で聞いた話の感想、質問、思い出す自分のエピソードや関連することをメンバー間でおしゃべり（メンバーはポストイットに書く個人作業（1分）→メンバー間の意見交換（3分）→学生はメモをとり、ポストイットを同じ仲間で分類）→次のグループがさいころ→フランス人生によるエピソード・・・（繰り返す） とまったマス目の話題によっては、子守唄、数え歌、フランス式計算方法、じゃんけん、オノマトペゲームなど紹介できるように準備している。
11時05分 ～11時20分 ～11時30分	まとめ グループででた言葉を学生ファシリテーターとともにまとめ、整理し、全体報告 WSのまとめ、アンケート記入依頼と次回WSの紹介
～12時	片づけと振り返り

側に意見を伝える親参加のグループディスカッションを行った。

参加者は以下の通りである。16名の申し込みのうち、11名が参加した。

- ・親11名（すべて母親、子どもの年齢は10ヶ月～3歳まで）
- ・学生2名（2年生）
- ・教員1名

これらの参加者を3グループ（親4名2グループ、3名1グループ）に分けて実践した。

作業の導入として、パワーポイントを使ってフランスでの活動の紹介を行った。ワークショップの様子を写真4に示す。



写真4 カードゲーム実施の様子

「子どもにとっての成功とは？」という問いかけから自由に思いつくカードを各自複数枚引き、カードの裏に、その言葉を選んだ理由や具体的なエピソード、想いなどを記入してもらった。その後、グループのメンバーにそれぞれが紹介を行い、メンバー間で意見交換を行った。最後に、参加者アンケートに記入してもらう間に、フランスや2015年度に日本で実施したNPO型幼稚園での結果を筆者が紹介した。

具体的なワークショップの進行は、第1回と同様、「導入」、「カードゲームの実施」と「まとめ」から成り立っている。導入として、第1回のワークショップの内容を学生が紹介し、第2回の位置づけについて説明した。カードゲームはワークショップの標準的な流れを活用した。グループに分かれてメンバー間で1分の自己紹介をした後、10分間で個人作業として3枚以上のカードを選び、その言葉に関連する具体的な方法、エピソード、意味や希望を裏面に書き出してもらう。次に、15分のグループ作業として、選んだ言葉と裏面をメンバーに紹介する。1人3分とした。続けてグループ作業として10分間でカードを分類・整理し、表札づけを行う。次に、15分でワールドカフェとして他のグループの結果を見学し、持ち帰りメンバーに説明し、意見交流を続けてもらうことにした。

ワークショップを実際に実施する中で、いくつかの変更点があった。1つ目は自己紹介に関する変更である。すべての人に発言権を与え、ワークショップ後の交流につなげる「未消化」の感覚を与えることを意図して厳密に1分と区切ることを予定していたが、学生らにとっては「会話をさえぎる」行為として終了時間を指示することが難しかった。したがって、その場で、学生たちの意思により各グループ5分間の時間を設定することに変更された。2つ目は、グループ作業としてカードを分類・整理し、表札をつける作業である。すでに予定時間を大幅に超えていたことからワールドカフェの実施を優先することにし、分類・整理・表札づくりの作業を省略した。

3. ワークショップの評価

3.1 第1回ワークショップ

参加者の親に「よかったこと・楽しかったこと」をたずねたところ、「フランスの子育てや歌などを（違う国の

育児について)知れてよかった」「手紙のことなど私もしてみようと思った」など、フランスの状況を知ることができた、という意見が聞かれた。また、「子供も遊びながらおしゃべり会に参加できたことがよかった」「子育てもママの時間も大切だと思った」とあるように、日本人の親同士の交流も行われ、リフレッシュする機会を提供することができたと考えられる。

学生に「よかったこと・楽しかったこと」をたずねたところ、「フランスのことも詳しく知れてよかった」「フランスと日本の違いが少しわかって面白かった」「手遊び歌が簡単だったのでまた実践してみたい」といった意見が聞かれ、ワークショップを通して、フランスと日本の子育てに関する文化の違いなどを理解することができたとと言える。

3.2 第2回ワークショップ

参加者の親に「よかったこと・楽しかったこと」をたずねたところ、「成功」という word にこれだけのカードの単語がある(考えられるんだ)と思ったこと」「人によって「成功」のイメージが全然違うことがわかって面白かったです」「一つの言葉でいろんな考え方があることがおもしろかったし勉強になりました」といったように、「成功」というキーワードに対して、多様な意見があることを知ることができた、という感想が多く見られた。

また、「初めて会ったお母さんにふかい話がきけて、おもしろいし、日本って色々な考えができてそれを自由に話合えていいなーと思いました」「自分の子育てを改めて考えるきっかけとなった」「ポジティブな考え方で子どもに接してらっしゃるお母さん達のお話を聞けて、参考にしたいと思いました」「母ではなく一人の女性として話す事が出来て良かった。新しい考えを持てた」といった意見から、子育てに対する意見の共有や振り返りを促すことができたと考えられる。

「同じ日本人でこれだけ違えば、人種が違えば本当にもっともっと違うんだろうなと思いました」「30年前の日本はまだ今ほど子育てしやすい社会じゃなかったと思うので、ご夫婦で協力されたんだろうなと思いました」という意見もあり、現在の日本と昔の日本や海外の子育て事情を比較する視点をもつ場合も見られた。

4. まとめと今後の課題

本稿では、国際交流を通じた子育て支援をサポートすることを目的としたワークショップを開発する授業を行い、実践した結果を紹介した。「行動演習Ⅰ」を通じた学生主体のワークショップを企画・実施を通じて改善すべき点として挙げられる問題点として、学生から教員との情報共有・相談は必至であるが、作業内容が多く、多岐に渡ることから学生自身が把握している内容に関する情報共有に限界がみられたことである。同時に、教員自身が授業内で作業内容の指示に重点をおきすぎるため、学生の特徴を把握し、詳細な確認作業を行えなかった点も浮かび上がった。また、ワークショップのテーマに関する背景の理解(「女性の子育てやキャリア」,「フランスという多文化社会における子育て事情」など)を深める学習時間が欠如していたことにより、ワークショップがどういった意味を持つのかについて前期の振り返りでは学生同士で意見交換することができなかった。他方、ワークショップ実施に関しては、参加者からワークショップ中の子どもの見守りをもっと学生にしてほしいという声が見られた。その原因は、本取組みが学生にとって学習の場であるということに対する理解を求める説明が不足していたせいであろうと考えられる。

今後はこれら改善点を踏まえ、ワークショップの開発・実践を継続的に行なうとともに、ワークショップ実施を通じた授業効果(語学力、教養、行動力)の評価の方法について検討することが課題である。

参考文献

- Bonnabesse Marie-Laure, Kinoshita Yumiko (2015) «La réussite des enfants parlons-en!»: Qu'en disent des parents en France et au Japon?» *Petite enfance : socialisation et transitions*, Nov 2015, Villetaneuse, France, <https://hal-univ-paris13.archives-ouvertes.fr/hal-01275958>
- IDE (2014) 学生の国際交流プログラム. IDE 現代の高等教育, No.558
- 木村充・中原淳(2012) サービス・ラーニングが学習成果に及ぼす効果に関する実証的研究: 広島経済大学・興館プロジ

- エクトを事例として. 日本教育工学会論文誌, 36(2) : 69-80
- 森田ゆり 『エンパワメントと人権』 解放出版社, 1998
- 文部科学省 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ～(答申).
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (参照日 2016. 09. 10)